

# ソーシャルワークの機能・役割に関する 実践的考察と検討

—児童養護施設での実践事例をもとにして—

松岡是伸<sup>1),\*</sup>, 小山菜生子<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>名寄市立大学保健福祉学部社会福祉学科, <sup>2)</sup>川和児童ホーム

【要旨】本稿の目的は、児童養護施設におけるソーシャルワーク実践事例を用いてソーシャルワークの機能・役割を明確にしていくことである。本研究の社会的意義は、ソーシャルワーク実践事例を検討・考察することによりソーシャルワーク実践理論、特にソーシャルワークの機能・役割に対して実践的積み上げに貢献できる点にある。その結果、本実践事例においては、子どもの生活を支えるうえで多くのソーシャルワークの機能・役割が活用されており、特に生活支援と言った場合、多くの機関や専門職が連携し、その組織化をおこなっていた。そしてそれらは本稿の中で見た子どもの生活の応答性を高めていくものとなっていた。一方、本実践事例の子どもの言動や行動には、脆弱性も見られた。そのため日々の関わりの中での直接援助機能や仲介機能、ケースマネージャー機能などは、子どもの脆弱性をケアする役割を発揮し、よりよい生活・社会環境を整えるという点で重要なソーシャルワークの機能・役割であった。

キーワード：ソーシャルワークの機能・役割、ソーシャルワーク実践、対処能力、応答性、脆弱性

## I. 諸言

現代日本の社会経済情勢の変化は、不平等や格差、貧困の問題にとどまらず、人々が相互に支え合う相互の機能までもが脆弱化している。これらの問題が向かう矛先は社会的に立場が弱い人々である。例えば近年、子どもと貧困を主題とする研究が増加傾向にあることからそのことを読み取ることができる。

このような状況の中で本研究は、児童養護施設におけるソーシャルワーク実践事例を用いてソーシャルワークの機能・役割を明確にしていくことが目的である。近年、ソーシャルワークの実践は複雑多岐にわたる社会経済情勢の養成に應えるかたちで拡大傾向にある。そのためソーシャルワーク実践事例をソーシャルワーク実践理論と連動させた研究が社会的意義を有していると考える。そこで本研究の社会的意義は、ソーシャルワーク実践事例を検討することによりソーシャルワーク実践理論、特に機能や役割に対して実践的積み上げに貢献できる点にある。

なお、本稿は、松岡・小山 (2012) 「ソーシャルワークの機能に関する実践的研究—児童養護施設での実践事例をもとにして—」『名寄市立大学紀要』第6巻 (名寄市立大学) の続編にあたることをはじめに断わっておく。

## II. 分析の枠組み

### 1. ソーシャルワークの機能・役割 —機能と役割の拡大傾向—

ソーシャルワークの機能・役割とは、ソーシャルワーカーが意識的に活用し、クライアントと共に支援・援助目標に向けた取り組みの働きかけである<sup>[1]</sup>。そしてこれらは法制度的なものと、ソーシャルワーカーによるものに分けることができる<sup>[2]</sup>。いずれにしろソーシャルワークの機能・役割は北川 (2007) が示したように、個人の環境や状況に対する適応能力や対処能力、応答性を高めることであり、そのことが援助・支援の本質的かかわりや基盤である<sup>[3]</sup>。

さらにソーシャルワークの機能・役割を明示的に整理したものには、日本社会福祉実践理論学会 (現日本ソーシャルワーク学会) ソーシャルワーク研究会が示したものがある (表1)。

これらのことから本研究の分析の枠組みは、ソーシャルワークの機能・役割の本質的基盤である個人の環境・状況に対する適応能力、対処能力、応答性

2014年12月5日受付：2015年1月29日受理

\* 責任著者

住所 〒096-8641 北海道名寄市西4条北8丁目1

E-mail : yoshinobu@nayoro.ac.jp

表 1 ソーシャルワークの機能と役割

機能	役割
仲介機能 (humanservices broker)	クライアントと社会資源との仲介者（ブローカー）としての役割
調停機能 (mediator)	クライアントや家族と地域社会の間で意見の食い違いや争いがみられるとき、その調停者としての役割
代弁機能 (advocator)	権利擁護やニーズを自ら表明できないクライアントの代弁者（アドボケート）としての役割
連携機能 (linkage)	各種公的な社会的サービスや多くのインフォーマルな社会資源の間を結びつける連携者（リンケージ）としての役割
直接的援助機能（処遇機能） (residential work)	施設内の利用者に対する生活全体の直接的な援助、指導、支援者としての役割
治療機能 (counselor/clinician)	カウンセラーやセラピストとしての役割
教育機能 (educator)	教育者としての役割
保護機能 (protector)	子ども等の保護者（プロテクター）としての役割
組織機能 (organizer)	フォーマル、インフォーマルな活動や団体を組織する者（オーガナイザー）としての役割
ケースマネージャー機能 (case manager)	個人や家族へのサービス継続性、適切なサービスの提供などのケースマネージャーとしての役割
社会変革機能(social change agent)	地域の偏見・差別などの意識、硬直化した制度などの変革を行う社会改良・環境改善を働きかける役割

（出典）日本社会福祉実践理論学会ソーシャルワーク研究会（1999）「ソーシャルワークのあり方に関する調査研究」『日本社会福祉実践理論研究』日本社会福祉実践理論学会（一部筆者らが加筆修正を加えている）

に着目しつつ、ソーシャルワークの機能・役割を考察していくことである。

## 2. 実践事例に対する分析枠組みについて

本研究の分析の枠組みとしては、①「施設生活の状況」、②「親子関係（週末帰省など）」、③「学校生活」であり、本研究の着眼点でもある。これらの着眼点からケース事例を整理・検討していく。また、事例を検討していく中で、医療・通院に対して目立った抵抗感などが確認された。そのため④「医療・通院に関する状況」という着眼点を随時設けることとした。

## 3. 本研究の方法

これまで本研究は年単位でケースを検討・考察してきたが、本稿より月単位に変更する。この変更により、具体的に事象を捉えることが可能となり、より実践事例をソーシャルワークの機能・役割と連動させて考察することが可能となるからである。ケース検討対象期間は、小学校 6 年時の 4 月から卒業までの 3 月までである。

## 4. 倫理的配慮

本調査をすすめるにあたり実践事例の使用承諾を M 児童養護施設の施設長に頂いた。そのうえで事実確認及び誤った表現がないかを当該施設にて確認した。ケースを記載する際、被調査対象者が特定できる表現は避け、必要最低限の登場人物・キーパーソンの記述にのみ留めた。

## III. 結果

それでは、本実践事例を分析した結果をあげていく。まず施設入所に至る経緯などを含めて小学 5 年生までの概要を示していきたい（詳細については松岡是伸・小山菜生子（2012）を参照のこと）。次に、小学校 6 年生から中学 1 年生までのケースの状況を記載していく。

### 本実践事例の概要

本実践事例の対象は、M 児童養護施設に入所中の A（男児）である。現在中学 2 年生で 14 歳である。家族関係（構成）は実父と妹 B 子である。ちなみに B

子は現在、同施設に入所中である。施設入所のきっかけは実父の養育が不可能となったためである。

施設入所後の施設生活では、小学校低学年の頃から暴力や暴言が見られたが、他者に対する暴言・暴力が顕著に見られ始めたのは小学校2年生頃からである。そのため対人関係では、いざこざが絶えない状況であり、学年が上がるにつれ暴力と暴言はエスカレートしていった。

実父との関係では、施設入所時には実父との面会時には緊張した様子であったが、継続的に週末帰省は続けられた。

学校生活では、低学年のときは不器用ながらもコミュニケーションを図っていたが、学年が上がるにつれ女子に対する暴力や暴言が多くみられる状況となった。小学校4年生の時には、女子に刃物(ハサミ)を振り下ろす事件を起こしている。そして教員に対して極端に甘える行動が見られ、高学年になるにつれて独占欲も見られた。授業中は落ち着きがなく、教室外へ抜け出すことも見られた。学業面は苦手で絶えず学習が遅れている状況であった。また小学校2年生のときに少年野球チームに入団するが、小学校5年生の時には退団した。なお小学校5年時には、個別支援学級に転籍し精神科にも受診・通院していたという経過である<sup>[4]</sup>。

### 小学校6年生の4月から卒業までの3月までのAの状況について

小学校6年時の4月から卒業までの3月までを月別に区分し見ていく。

**小学校6年生4月；【施設生活】** 新年度を迎えてもバタバタと落ち着かない状況で暴言や暴力も続いていた。4月上旬、入所児童とのトラブルを注意するとAは自分が悪者扱いされていると思っており暴言を吐く状況であった。そして職員や他の子どもに対して担当職員を怒らせることを面白がっている言動が見られた。

集団登校では、集団で登校することを拒み続け、登校中の生徒に悪戯をかけ続け泣かせてしまうこともあった。その後も他の生徒との喧嘩が続き、Aはただ「ムカつく」と言う状況であった。また全校遠足では生徒とトラブルを起こし、仲裁に入った教員を蹴ったり、下校後も小動物(猫)を水の張った浴槽に沈めるなどの行為が見られた。これらに対して職員らが注意するもののイライラは収まらず、エスカレートする一方であった。

**【父子関係】** 実父宅の週末帰省は継続されていた。学校生活が安定しないため施設にて、A、実父、担当職員で話し合いを行った。その後Aは、その日を落ち着いて過ごせたため、実父から褒めてもらうようにした。

**【学校生活】** 学校では落ち着かない様子であり、暴言や暴力を繰り返している状況であった。4月下旬、Aの暴言・暴力がひどく、それが担任教員にも及んでいる状況であった。また服薬の影響かは定かではないが、授業中に居眠りすることも多い。しかし起きているときは、絶えず他者を暴言や暴力で攻撃している状況であった。

**【医療・通院の状況】** 服薬に関する抵抗感が多くみられ、その抵抗感は通院時に顕著に見られた。4月中旬、担当医からは特に朝、服薬するように指導を受けたがAは服薬を酷く嫌っている状況であった。4月下旬の通院時の朝、服薬を促すと、Aは「こんなの飲むから、おかしくなるんだ」や「俺は異常なんだろう、異常者だって言いたいんだろ」など、イライラした状況であった。

**小学校6年生5月；【施設生活】** 施設での暴言・暴力は収まる気配がないため、Aと実父、施設長、担当職員らを踏まえ話し合いを行った。そこでは、①Aはしっかりと服薬すること、②特に学校では暴力をふるわないことを約束として確認をした。

Aは4月下旬の全校遠足でのトラブル以降、登校を控えていたため学校教員らが様子を伺ってきた。そこでAは学校に行きたいと伝える。そしてその中で、Aは自分なりの対処として、薬は眠くなるので夜に服薬するようにするや、イライラしたときは水などを飲むなどと話をしていた。

5月中旬、施設内で検討しAに対する担当職員は定めず、全員体制で対応することが決められた。5月下旬、児童相談所(以下、児相)職員と会議を行った。そこで今後Aの暴力がひどくなった場合(対人・対物共に)、一時保護所への入所を検討・要請をすることとなった。

**【父子関係】** ゴールデンウィーク前、実父宅へは帰省したくないと言っていたが、実父が迎えに来ると甘えていた。

**【学校生活】** 登校再開後、Aが落ち着いて過ごせたのは初日のみであった。その後、友人につっかかったり、ボランティアの方を殴ったり、小動物を追い掛け回したりなどという状況であった。そのため学校でもカンファレンスが持たれ、①服薬の継続と

経過観察をすること、②学校への登校は 8 割くらいを目指し、2 割は別プログラムで対応していくこと、③暴力をふるわないこと、ふるった場合は今の生活を失うことなどを A に告げることとなった。そしてこれらは A を援助・支援する側の共通の確認事項となった。

【医療・通院の状況】 A は通院時、担当職員の身体に過度に触る。A に対して注意すると一応やめるが、また触り始める。甘えの感情の表出にも思われる。

**小学校 6 年生 6 月；【施設生活】** A の暴言や暴力はエスカレートしている状況であった。そのため実父、施設長、関係職員らでカンファレンスを行ない一時保護所の利用を検討した。その後施設・学校での暴言・暴力が収まらないため実父に了解を得て一時保護所を利用することとなった。その夜に児相ワーカーも交え A に一時保護所への利用を伝えた。A は沈黙して聞いていたが次第に身体がガタガタ震えだし、涙をこぼし始めた。その夜、A は夜尿をする。一時保護所に入所中（2 週間）、A に暴言・暴力は見られず、入所理由も「年下の子に暴力をふるったから」「猫に八つ当たりしたから」などと認識している様子であった。A が一時保護所入所中、現状確認と今後の対応策を学校や児相などの関係者と検討した。その結果、退所後、学校への登校は週 4 回、週 1 回は児相に通所することとなった。

退所時 A は「顔がスッキリし、肌もきれいで、とてもさわやかな印象」であった。A は、一時保護所入所前は「怖い」ところだと思っていたらしく、入所したら A にとっては案外楽しく、イライラせず落ち着いて過ごせる場所であったようである。そこで職員が入所前と入所後の変化を尋ねたところ A は自分自身を「ゼロ点から 100 点くらいに変化した」や「保護所に行く前の自分は異常」などと振り返っていた。

【父子関係】 A が一時保護所入所中も A のこれまでの暴言・暴力について幾度か話し合いが持たれていた。

【学校生活】 一時保護所退所後、A は落ち着いた様子であり、学校生活でもイライラしないように頑張っている様子であった。

【医療・通院の状況】 服薬に関しては一貫して抵抗感がある。特に一時保護所入所前、服薬量を増やすことにはしぶしぶ応じていた。これまで服薬への抵抗感が強く見られるため、実父から A に対して

服薬することの必要性を再度伝えるようお願いをした。

**小学校 6 年生 7 月；【施設生活】** 7 月上旬、時折、暴言や暴力をしていた頃の兆候が見られるものの、比較的安定して過ごしている状況であった。

【父子関係】 週末帰省は継続的に実施されていた。

【学校生活】 7 月上旬は、それ以前と比較すると安定的に過ごしていた。しかし 7 月中旬の通院を境にして変化が見られ、教室に入るなり A は自らのイライラを理由に怒鳴り散らし、友人の持ち物を取ったり投げたりしていた。

7 月下旬、登校直後よりイライラした様子が多く見られた。A は個別支援学級で過ごすことができず暴れだしてしまう状況であった。学校教員らは対応に苦慮している旨を施設職員らに連絡してきたため、新学期が始まる前までに改めてカンファレンスを実施することを確認した。

【医療・通院の状況】 A は担当医から最近の様子を聞かれ、服薬量を減らしたいことを伝えていた。担当医は、服薬量の変更は聞き入れなかった。そのため A は明らかに苛立ち担当医の間を見ては付添いの職員を叩いたり、処方箋を破り捨てたり、薬局で薬の受け取りを阻止するなどの行動が見られた。そのような中、心理職とのカウンセリングの中で A は、一時保護所で頑張ってきたから服薬量が減ると思っていたが変わらないことに自暴自棄になっている様子であったという。さらに医療に対しては敵対視する言動が多々見られた。

**小学校 6 年生 8 月；【施設生活】** 夏季休暇とともに施設行事があり、ある程度自由に安定的に過ごせている様子であった。8 月中旬に友人とのイザコザから発展的に荒れてしまい、職員の服を食い破ることがあった。その後多少イライラするところは見られたが施設での生活を続けることができた。

【父子関係】 週末帰省は概ね順調に続けられていた。約 4 日間の帰省で A は、実父に叱られ施設に「帰れ」と言われ帰ってきたことがあった。また A は実父に頼まれたので、B 子を幾度も連れて帰ろうとしていた（B 子は帰省を拒否していたので、A だけが帰省するようになっていた。）。

【学校生活】 夏季休暇明け前に学校関係者と施設職員らでカンファレンスを実施した。そこでは主に①A は 1 時間目からの登校を望んでいたが、教員と職員の見立てでは困難が予想されたため従来通り 2

時間目から登校し給食終了後に下校とした(職員が送迎していた)。②週1回半日は児相に通所する。③中学校で個別支援学級の検討などが話し合われた。

**小学校6年生9月；【施設生活】** 学校に迎えに行くとAは職員の通りすがりに暴力をしてくることがしばしばあった。また職員らでAの現状報告が行われた。そこでは夏季休暇中は個別での関わりを増やしたこともあり、以前より穏やかに生活している状況であるという報告があった。しかし過度に褒めすぎると調子に乗った言動・行動がみられ、甘えてくる傾向が強くなる。また必要以上の身体接触をしてくるため、しっかりと制止することも併せて確認した。

**【父子関係】** 9月中旬、週末帰省後Aは、2日間家に帰るのは「疲れる」と言う。またAの現状から実父には、Aに対して過度に頑張ることを強調しないように伝えた。実父にはAの現状を維持することが大切であることを伝えた。

**【学校生活】** この頃Aに対してスクールソーシャルワーカー(以下、SSWer)が毎日30分個別対応をしていた。SSWerは最近、Aの攻撃性は薄れていると評価し、今後はスクールカウンセラーも含めてAには対応していく方針であるという。また9月中旬に学校とのカンファレンスを行った。Aの現状として、暴力行為が減少しているが、教員に対する甘えが酷くなっているという。登校は現状を維持し、今後も成功体験を積み重ねていくことが大切であることを確認した。9月下旬、学校からの連絡帳では、Aが自分のイライラを言葉で伝え、我慢できたことなど書かれておりAなりに対処している様子であった。またAは、友人から嫌味を言われたとき、自ら保健室に行き保健教諭にそのことを聞いてもらい気分を落ち着かせていたという。

**【医療・通院の状況】** 9月中旬には、朝から服薬を拒み、服薬をしたふりや掌に隠したりしていた。職員が服薬しなければ登校できない旨をAに伝えると、Aは「薬ください」と言って拒むことなく服薬をした。どうやらその時にいた実習生がAに服薬することを口添えた様子であった。しかし登校後、壁を蹴ったり、自分のイライラの原因は服薬したせいだと騒ぐこともあった。

**小学校6年生10月；【施設生活】** Aの施設生活は、落ち着かない様子であったが、10月中旬には職員らの作業を一緒に手伝い、また庭掃除などをしてしている場面も見られた。

**【父子関係】** 10月中旬、実父に週末帰省の際に早めに寝かせるように話すが、実父は、「寝るのが遅くてね…」という返答であった。10月下旬、実父との話し合いを行う予定であったが、仕事が遅くなるため遅れるといい、結局行うことはできなかった。またAはB子に対して学校で暴力をふるってやると発言しており、B子に対するイライラを強めている傾向であった。

**【学校生活】** 10月上旬、年下の生徒を脅し叩く、女子が作った粘土作品を壊し泣かせるなどの行為が見られた。10月中旬、教室に入るなり、「眠くてイライラする」と言い、周りの子どもに悪戯をし教員が注意しても落ち着かない状況であった。10月下旬の宿泊研修では、Aに対して各教員が個別に対応するが、Aは関わってくれる教員にべったりと甘えきっている様子であった。そのため教員らは、Aとどのように適切な距離を保ちかわりを持つかが課題となった。

**小学校6年生11月；【施設生活】** 学校の下校途中にAは、学校で落ち着いて過ごしていることに対して「これからもきちんとしないとね」と穏やかに話をしていた。ある程度生活に波はあるものの、その後施設では穏やかに過ごしている様子であった。

**【父子関係】** 週末帰省は継続的に実施されていた。

**【学校生活】** Aは比較的安定的に過ごしている状況であった。学校にてカンファレンスを行った。ここ2週間ほど年下の特定の生徒にイライラしている様子であった。その原因は、年下の生徒が障がいを抱えているため大きな音を出してしまうためであった。

**【医療・通院の状況】** Aは担当医に対して自分のイライラ感などを話し、担当医から「自分のことを振り返れるようになったね」と言われるほどであった。しかしながら、服薬量が変わらないことに対しては処方箋を奪い取り逃げ回ったりするなど苛立ちを顕していた。

**小学校6年生12月；【施設生活】** 12月中旬、学校で物品を壊した後、Aは自分の思い通りにならないことに対し、特定の職員のせいだと言い、その職員に突っかかっていた。その後その職員と話し合いをすることで気持ちを落ち着けることができた様子であった。

12月下旬、実父、児相ワーカーらも含めてカンファレンスを行った。主な内容として中学での個別支援学級のことが話し合われた。実父は普通学級を希

望していた。児相での検査結果などを説明したところ、実父は納得しつつも個別支援学級の進路に関しては受け入れられないという態度であった。

【父子関係】 児相通所日に施設に帰ってこないため職員らが実父宅へ行ったところAと実父がいた。実父は、職員には取り合わない態度を示していたが、Aに「仕方ないから、一度帰れ」と言い、Aは戸惑いと不満そうな表情を見せつつも迎えの自動車に乗り、帰路についた。

【学校生活】 12月上旬、Aは落ち着いて過ごしている様子であり、泣いている友人の話し相手になっていたという。しかし12月中旬、Aはイライラして学校の物品を壊してしまった。そして学校に職員が迎えにいくもののAは、ふざけて逃げ回る状況であった。翌日校長先生らに謝罪するときも終始、笑っている状況であった。12月下旬、学校でカンファレンスを行った。その中でこれまでAは、概ね安定して過ごしている状況であり教員の話しも聞けるようになってきているという。しかし教員間では、「いい子どもであることを演じているように見える」と思っていたらしく、そんな矢先に物品を壊してしまった。

小学校6年生1月；【施設生活】 1月上旬、児相ワーカーが来所しまず、Aと面接を実施したうえで、職員間で話し合いを行った。Aとの面接では、週末帰省や個別支援学級のことが話し合われた。Aは個別支援学級に入るとやりたい仕事に進めなくなると言い、個別支援学級に対して拒否的であった。

1月下旬、Aは年上の女子と話しをしている最中、女子の手を掴んで押し倒してしまった。それを職員が制止するとAは職員に対して暴言を吐き、反抗した。

【父子関係】 週末帰省は継続的に実施されていた。

【学校生活】 1月の授業開始の時Aは、とてもご機嫌で年下に対してもやさしく接していた。しかし全般的には落ち着かずイライラしている状態が続き、窓から逃げ出してしまうこともあった。

学校と児相ワーカー、職員でカンファレンスを実施した。主に学校の様子と今後の進路についてである。学校では学習の遅れが著しく目立つ状況であった。評価できる点は教員らが「待っていて」というとある程度待てるようになった点である。今後の進路についてAは、中学生からは実父宅から通学したいことや普通学級に行きたいなどと言っていた。しかしながらこれまでの状況を見ると中学においても

個別支援学級が適当であり、実父との話し合いを通じて理解と同意を得る必要性があるという判断に至った。

小学校6年生2月；【施設生活】 Aの年下や女子に対する暴言や暴力が続き、イライラが募り落ち着かないことが多々見られた。例えば児相への通所が児相の都合でキャンセルとなったためワーカーから連絡が入り職員がAに取り次ぎ事務所で電話していたところ、その一連の流れを知らない職員が、Aに「何で事務所にいるの？」と問うとAは徐々に落ち着きを失い、窓を叩いたり、柵に乗ったりして職員らに対して挑発した態度をとってきた。その後調理場から刃物を持ち出してくるなどAの行動はエスカレートし職員が制止する事態となる。また別の日にはドアを蹴り飛ばし穴をあけてしまったこともあった。これらのことからAと児相ワーカーで面接に入る。Aは興奮した様子であり、児相ワーカーに対して職員の対応が悪いなどと話をしていた。

【父子関係】 実父が仕事帰りに施設に寄ることがあり、実父が施設に立ち寄るか、寄らないかで頭が一杯になることがしばしば見られた。

【学校生活】 学校では落ち着かない状況であった。2月中旬、中学校にてAの今後の進路についてカンファレンスを行った。参加メンバーは、小・中学校関係者、児相ワーカー、職員（施設長も含む）、実父である。これまで実父は、Aの進路についてAが望む進路に進ませたいと思っている状況であった。そのうえでカンファレンスでは、これまでの生活状況や学業成績、実父が気にしている個別支援学級の就職率などが話し合いとなった。その結果、実父は中学校での個別支援学級への理解を示した。そのためそのことを伝える際、Aに対して最良の選択をしたという言い方で伝えてほしいことを実父に頼んだ。その後の週末帰省で実父より中学校での進路がAに伝えられた。しかしながら実父から伝えられた内容がAにとって納得できていないようで、個別支援学級の友人と喧嘩になったとき、お互いに「障がい者」と言い合いになっていたという。その後担任教員が喧嘩を制止しなだめるとAは、イライラ感を抑え、友人に謝罪していたようである。

小学校6年生3月（卒業）；【施設生活】 施設では落ち着かず、暴言や暴力が多く見られた。3月下旬、Aと職員と一緒に実父宅へ行く予定の日、別に予定のあったB子と一緒に家に連れて帰ろうとしたので、今日の予定は違うとAに伝えたところ納得が行かず、

次第にイライラし始め、職員にかみついたり殴ったり  
の暴力を始め、窓ガラスまでわってしまった。実  
父は A が興奮するのは、B 子と一緒に実父宅に行く  
ということを制止しているためであり、施設の対応  
が悪いと言い職員の対応を批判した。

これらのことから A と実父、児相ワーカー、職員  
らでカンファレンスを行なう。そこで施設長よりこ  
のまま A を施設で生活させることは難しいという旨  
を伝える。そして 3 月下旬の春休み中の対応は不可  
能で、その間 A は実父宅への帰省することとなった。

【父子関係】 週末帰省は継続的に実施されてい  
た。

【学校生活】 年下の生徒をからかい、A は落ち着  
きがなく、教員が注意しても聞くことができない状  
況であった。3 月上旬、A は担任教諭が体調不良のな  
かで授業をしていることを心配して協力的な様子で  
あった。3 月中旬 小学校の卒業式を迎えた。実父が  
仕事の都合で参加できなくなり職員が保護者の代わ  
りに参加した。A は実父が買ってくれたスーツに身を  
包み、緊張してこわばった表情を浮かべていた。み  
んなに卒業を祝福されているときは時に照れくさそ  
うな表情を浮かべていた。

【医療・通院の状況】 3 月上旬 医療の受診では、  
A は「しょうがないなあ」と言いながら一連の受診を  
終えていた。その後服薬量に関しては、「朝の分は減  
らしても良いと思う」と言っていてイライラした様  
子であった。

#### IV. 考察

これまで「Ⅲ. 結果」のように A の小学校 6 年時  
を見てきた。ここではまず、A の「施設での生活」、  
「親子関係」、「学校生活」、「医療・通院の状況」を  
整理・考察し、そのうえでソーシャルワークの機能・  
役割について考察を深めていきたい。

##### 1. ソーシャルワーク実践からの考察

###### 1) 施設生活について

A の施設生活は年間を通じて、暴言・暴力が続いて  
いる状況であった。暴力は器物破損に留まらず、職  
員（大人）、女性、年下の者に発展していた。A の暴  
言や暴力が、特にエスカレートした時期は、5 月～6  
月、年が明けた 2 月、3 月である。初めの 5 月～6 月  
は一時保護所に入所を決定するほどであり、入所に  
至るまでの施設生活、学校生活などで暴言・暴力が

絶えない状況であった。またこの時期小動物に対し  
て危害を加える場面も見られた。小動物に対する虐  
待は A の内的な状況や環境面が不安定であることを  
示すため、これらのシグナルを逃さない関わりが重  
要となってくる。

その中でも比較的安定した生活をしている時期が  
見られた。それは大きく 2 つの時期に見られた。ひ  
とつは、一時保護所を利用した 6 月以降と、もうひ  
とつは、長期休暇などで A に対して個別対応の機会  
が多く持たれた場合であった。

これらのことから A は、全てのコミュニケーション  
場面を暴力や暴言で応答しているわけではない。  
施設職員に対しては「甘え」を見せたり（過度に身  
体接触も見られるが）、お手伝いなどはしっかりと最  
後までやり通すことも見られた。

###### 2) 父子関係について

一年間を通じて A の週末帰省は概ね継続的に実施  
されてきた。前半は週末帰省後、疲れた様子も見ら  
れていた。そして長期の帰省になると途中で帰って  
くる場面もあった。週末帰省により A の生活リズム  
が崩れることが多く、実父に対して A の生活リズム  
を崩さないように話し合いをするが、実父から積極  
的に促す姿勢は見られなかった。実父は A に対する  
養育意欲は見られるものの養育能力（力量）を欠く  
ところが見られた。施設生活や学校生活での状況を  
含めて考えれば家庭復帰は難しい状況である。

###### 3) 学校生活について

A の学校生活は落ち着きがなく、年下や女子、教員  
らに対する暴言と器物破損から対人的な暴力行為な  
ど暴力の繰り返しであった。A は自分の思うようにな  
らない現状や環境に対してイライラを募らせている  
ことが多々見られた。12 月上旬に学校の物品を壊し  
てしまった際も、自分の思い通りに事が運ばないこ  
とへのイライラ感が募ったうえでの破壊行為であると  
推察される。それが他者とのほんの些細なコミュニ  
ケーションの擦れ違いでもある。そのような中で、  
A はイライラ感を自らの考えと行動で鎮めようと  
していた場面も見られた。例えば、6 月の一時保護所利  
用後は、イライラを抑えようと頑張っている様子が  
伺えたり、イライラを感じたときに自分なりの対処  
方法を考えたりしていた。そして夏季休暇明けには A  
は、イライラ感を保健教諭などに打ち明けることに  
より沈めている状況も見られた。

一年間を通じて暴言と暴力は絶えなかったが、他  
者に自分のイライラ感を伝えるや、抑えるなどを少

しでも A 自身が実践できたことは成功体験のひとつである。これはソーシャルワークの機能・役割の本質的な関わりにつながる A の問題対処能力や対応性の向上として評価して良い点である。

#### 4) 医療・通院に対する抵抗感

医療・通院に対して A は、一貫して抵抗感を示していた。特に日常生活における服薬と受診・通院に対して抵抗を示していた。A は自分のイライラ感や思い通りにならないことなどを象徴的に「薬」自体に原因を帰結することが多く見られた。例えば、A は薬に対して「こんなの飲むから…」(4 月)と発言したり、服薬したため眠たくなりイライラする、通院時には担当医に薬の減薬を交渉したり、処方箋を奪い取り逃げ回ったりなどで示される。また 7 月に A は、比較的暴言や暴力を抑制し日常生活を過ごしていたことがあった。その後服薬量が減少しないことに対して A は苛立ちを示し問題行動へとつながっていた。A にとって服薬量を減らすことは、自分なりの対応・対処(性)であったと考えられ、それが叶わないときの問題行動を起こすという脆弱性が見られた。

これらのことから A は服薬や受診・通院などに抵抗を示し、偏見やスティグマを感じていたと思われる。A にとって服薬が正常かそうではないかの判断の分け目となっていると考えられる。そして医療機関への受診を境に施設・学校生活での行動が変容することを考えれば、受診・通院などが A に与える影響の強さを示す。さらに A にとって受診や通院は、自分自身の考えの中で正常か異常かを判定される特殊な空間で抵抗に値するものになっているとも考えられるのである。

またこれらの抵抗感の根底には、実父の考え方も関連している。実父が抱くステレオタイプの偏見(主に“個別支援学級”や“障がい”、“精神科”などに対する偏見)が A の社会的アイデンティティに影響を及ぼしていると考えられる。

以上のようにソーシャルワーク実践からの考察として「施設生活」、「父子関係」、「学校生活」、「医療・通院に対する抵抗感」を見てきた。これらすべての点において A の脆弱性が見られた。施設生活や学校生活などでは、全てを暴力や暴言で応答しているわけではないものの、やはり他者と適切なコミュニケーションをとれない点は A の脆弱性である。また医療・通院で見られた抵抗感では、自分の意向が叶わない場合に問題行動を起こすなどの脆弱性が見られていた。

## 2. 実践事例とソーシャルワークの機能・役割について

これまで「Ⅲ. 結果」と、「Ⅳ. 考察」の「1. ソーシャルワーク実践からの考察」で見てきたものを「事実経過」「援助展開」「ソーシャルワーク機能」として図式化した(図 1)。これによって実践事例から援助展開を整理して把握することができ、そのことによってどのようなソーシャルワークの機能・役割が用いられているかを明らかにすることができる。

そこで実践事例で用いられたソーシャルワークの機能・役割を集計した結果、連携機能(第 1 位)、直接的援助機能(第 2 位)、仲介機能(第 3 位)、ケースマネージャー機能(第 4 位)、組織機能(第 5 位)、調停機能(第 6 位)、保護機能(第 7 位)、社会変革機能(第 8 位)が用いられており、その他心理職、精神科医によるカウンセリングは、治療機能的な機能・役割を見ることができた。なお本実践事例からは、代弁機能を確認することができなかった。

ここでは実践事例とソーシャルワークの機能・役割を上位から順に、それぞれ考察していきたい。

第 1 に、本実践事例で主に使われていたソーシャルワークの機能・役割の中で最も多かった連携機能である。連携機能の増加は、ソーシャルワークの機能・役割の拡大傾向を示すものであると考えられる。そして A の事実経過を見る限り、A の言動・行動に対する対応やその社会環境の整備・維持などのためには多くの連携を必要としていた。要するに A の生活を支えるためには、単一の機関だけでは難しく、多くの機関(社会資源)と連携したうえで支えていく必要があるということを示しているのである。

第 2 に、直接的援助機能である。日々の援助展開を考えれば、児童養護施設ワーカーの性格や任務からすれば直接的援助機能が上位にあがることは当然であると言えよう。直接的援助機能・役割は、施設内における A の生活全体の直接的な援助、指導、支援者としての役割と機能があり、図 1 のような事実経過や実践事例では書ききれないが、ほとんどの場面で用いられていた。

第 3 に、仲介機能は、A と社会資源とを仲介をする役割を担う。A は他者と接触する場合、攻撃的な言動や行動が多く見られていた。よって仲介機能は、A とその A を取り巻く環境を支える役割を果たしていたということになる。

第 4 に、ケースマネージャー機能は、主に父子関係で用いられていた。これは週末帰省や父子関係の



維持、施設生活、週末帰省の援助の連続性と継続性を担う機能であり、サービスの継続性という観点から重要な機能である。また、家族再統合という観点から考えても重要な役割を担う機能である。

第5に、組織機能は、援助や支援における活動の継続性という点においてオーガナイザーとしての機能・役割を担う。この組織機能は主にカンファレンス時に見られ、連携機能若しくは仲介機能と合わせて見られることが多かった。特に学校生活や教育による発達保障を考える場合、A本人とその環境を支えるバックアップ形成の役割を担っていた。

第6に、調停機能によって、意見の食い違いや紛争に関する調停者的役割が少なからず見られた。このAの場合、この調整機能は小学校6年時5月より担当のワーカーのみが担うのではなく、施設職員全体体制で行われていた。そのためAと児童養護施設ワーカーに意見の相違などが見られた場合、ファミリーソーシャルワーカーや心理職がその機能を用いて役割を担う場合もあった。

第7に、保護機能である。これは主に、8月の週末帰省時において突然、施設に帰ってきたときに見られた。このときAを保護するという役割がある。また、Aの暴力がエスカレートし危機が増幅した場合、Aを保護する意味でも制止した役割を担った場合は保護機能と位置付けることができる。

第8に、社会変革機能である。社会変革機能とは「地域の偏見・差別などの意識、硬直化した制度などを行う社会改良・環境改善を働きかける役割」を持つ機能である。Aは精神科の通院と服薬、個別支援学級などに対して偏見やスティグマが多く見られた。そしてその影響のひとつとして実父の精神科や個別支援学級に対する差別観や偏見があった。そのためAの今後の進路を考える際に、実父に対してこれらの差別や偏見を持つ考え方を払拭できるような説明や働きかけを行っていた。

以上のようにソーシャルワークの機能・役割を考察してきた。そこでは、Aの施設生活において暴言・暴力がエスカレートしている状況からやはり、直接的援助機能が主に用いられていた。そして学校生活での暴言・暴力に対しては、連携機能、仲介機能が用いられていた。父子関係の維持・形成のためには、主にケースマネージャー機能が用いられるなどが明らかになった。また、本実践事例では、取り上げられなかったものの教育機能・役割は、Aに対する施設内での継続的学習支援に見ることができる。週1回

の心理職（セラピスト）によるカウンセリングもAの状態により実施できないことはあるものの継続的に実施されていた。

これまで見てきたように本実践事例において様々なソーシャルワークの機能・役割が用いられていた。特にAの暴言・暴力のエスカレートにより、支援する側（ワーカーのみならず教員なども含めて）は多くの対応を迫られ、直接的な場面では苦慮していた。これらの対応を実践事例では、単一の機関や施設などで抱え込まず、Aにとってよりよい環境を整えるため連携機能、仲介機能、組織機能などを頻繁に活用していた。この点からAの生活を支援するためには、多重層的な連携と組織化が必要ながことが明確となった。

このような取り組みは、「1. ソーシャルワーク実践からの考察」でも見てきたように、Aの脆弱性に対するソーシャルワークの機能・役割の活用である。そしてこのソーシャルワークの機能・役割の活用によって、Aの生活の適応能力、対処能力、応答性を高めることにつながっていた。その成果（効果）は、本実践事例の中でAがイライラ感を我慢したり、他者に悩みや考えを打ち明けたりする場面などで見られた。また喧嘩をしてもエスカレートせず、謝罪した場面などは、Aの対処能力の高まりとして評価することができる。これらのことからソーシャルワークの機能・役割の活用は、Aの生活の適応能力や対処能力、応答性を高める支援・援助につながっていると考えることができる。

## V. 結語

これまで見てきたように本研究は、実践事例をソーシャルワークの機能・役割と関連させて分析してきた。その結果、Aの生活を支えていくうえでソーシャルワークの機能・役割は多く活用され、特に生活支援と言った場合、多くの機関や専門職が連携し、その組織化をおこなっていた。そしてそれらは本実践事例の中で見た子どもの生活の応答性を高めていくものとなっていた。一方でAの言動や行動には、脆弱性も見られた。そのため日々の関わりの中での直接援助機能や仲介機能、ケースマネージャー機能などは、Aにおける脆弱性をケアする役割を発揮し、Aにとってよりよい生活・社会環境を整えるという点で重要な機能・役割であった。

ソーシャルワークの機能・役割に関する実践的考察と検討

事実経過	援助展開	ソーシャルワーク 機能
<p>○4月（小学校6年生） （施設生活）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・新年度を迎えても暴言・暴力が続いている状況</li> <li>・友人とのトラブルから下校後、小動物（猫）を水の張った浴槽に沈めるなど（父子関係）</li> <li>・週末帰省は継続（学校生活）</li> <li>・授業中寝ているか、暴言・暴力を繰り返す日々</li> </ul> <p>（医療・通院の状況）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・医療に対しての抵抗感が強い。また服薬に関しては「こんなの飲むからおかしくなるんだ」と言う。通院時にイライラ感が多く落ち着かない行動が目立つ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日常生活での関わり</li> <li>・虐待行為に関する指導</li> <li>・父子関係を維持できる関わりと話し合い</li> <li>・通院に関する付き添いと服薬管理</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・直接的援助機能</li> <li>・直接的援助機能</li> <li>・ケースマネジャー機能</li> <li>・連携機能（※教員による直接的な援助）</li> <li>・仲介機能</li> <li>・連携機能</li> </ul>
<p>○5月 （施設生活）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生活は楽しそうであったが、暴力や暴言、嘘が目立つ</li> <li>・職員（施設長・担当職員など）、実父と話し合い、話し合いの結果による確</li> <li>・中旬 職員ら夜による会議。Aの担当職員は定めず、全員体制で対応</li> <li>・下旬 児童相談所ワーカーとの会議 暴力がひどくなった場合、一時保護所への検討・要請を実施することを確認</li> </ul> <p>（父子関係）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・実父との週末帰省は継続</li> </ul> <p>（学校生活）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学校でのカンファレンス（施設生活参照） カンファレンスでの内容と今後の援助方針 ①服薬管理と経過観察、②学校への登校は8割を目指す、③暴力をふるわないこと 等</li> <li>・暴言・暴力がエスカレート</li> <li>・登校時からイライラ感が収まらず、暴言・暴力に発展する</li> </ul> <p>（医療・通院の状況）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・通院時の抵抗も強いが、付き添いの職員の身体を過度に触れ、甘える行為が多々見られる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日常生活での関わり</li> <li>・カンファレンスの実施</li> <li>・カンファレンスの実施</li> <li>・カンファレンスの実施</li> <li>・暴力がひどくあった場合の対応の検討</li> <li>・父子関係を維持できる関わりと話し合い</li> <li>・カンファレンスの実施</li> <li>・通院に関する付き添いと服薬管理</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・直接的援助機能</li> <li>・連携機能</li> <li>・連携機能</li> <li>・連携機能</li> <li>・ケースマネジャー機能</li> <li>・連携機能</li> <li>・組織機能（※教員による直接的な援助）</li> <li>・仲介機能 連携機能</li> </ul>
<p>○6月 （施設生活）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・暴言・暴力がエスカレート</li> <li>・上旬 一時保護所の利用を決定 決定の際、Aは恐怖心をあらわにする（一時保護所では穏やかに過ごしていた様子）</li> <li>・下旬 以前よりは安定した生活状況</li> </ul> <p>（父子関係）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・週末帰省を継続</li> <li>・B子の怪我・手術により、実父が実母と会う算段をつけてしまう</li> </ul> <p>（学校生活）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・上旬は暴言・暴力がエスカレートしていたものの、一時保護所利用後は、イライラしないように頑張っている様子がうかがえた</li> </ul> <p>（医療・通院の状況）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・一時保護所退所後も通院に関しては抵抗感が見られる様子</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・暴言などへの指導</li> <li>・父子関係の維持と形成のための関わり</li> <li>・多職種間でのカンファレンス開催</li> <li>・通院の付き添いと服薬管理</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・直接的援助機能</li> <li>・ケースマネジャー機能</li> <li>・連携機能（※教員による直接的な援助）</li> <li>・仲介機能</li> <li>・連携機能</li> </ul>
<p>○7月 （施設生活）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・暴言・暴力の兆候は見られるものの安定的に過ごしている様子</li> </ul> <p>（父子関係）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・週末帰省は継続</li> </ul> <p>（学校生活）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・通院後を境に落ち着かず、イライラした状況であった。7月下旬より夏季休暇に入るため休暇終了前にカンファレンスを実施することを確認</li> </ul> <p>（医療・通院の状況）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・通院に対しては抵抗感を見せる。Aは薬を減らしたい様子。しかしそれが叶わず、処方箋を奪い取り破いたり、薬局で薬の授受を阻止しようとする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生活周期の整いとその維持のための関わり</li> <li>・父子関係の維持と形成のための関わり</li> <li>・学校との連絡調整</li> <li>・通院に関する付き添いと服薬管理</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・直接的援助機能</li> <li>・ケースマネジャー機能</li> <li>・連携機能</li> <li>・組織機能（※教員による直接的な援助）</li> <li>・仲介機能 連携機能</li> </ul>
<p>○8月 （施設生活）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・夏季休暇により比較的自由に過ごせたことから、安定的に生活が送れた様</li> <li>・中旬 友人とのイザコザから、荒れてしまい職員の服を食い破る</li> </ul> <p>（父子関係）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・週末帰省は継続。帰省中に実父に怒られ施設に帰れと言われ、帰ってきたことがあった</li> </ul> <p>（学校生活）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・夏季休暇終了前に学校・職員らの関係者によるカンファレンスが実施された</li> </ul> <p>カンファレンスの結果 ①1学期と同様に2時間目からの登校をして給食終了後に下校する。施設職員が送迎をする。Aは1時間目からの登校を望んでいたが、教員と職員の見立てからは登校には困難が予想された。 ②週1回半日は児童相談所にて通所する。 ③今後中学校で個別支援学級に入るか否かの再検討 等</p> <p>（医療・通院の状況）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・通院・服薬管理は継続</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生活周期の整いとその維持のための関わり</li> <li>・行動に関する指導</li> <li>・父子関係の維持と形成の支援</li> <li>・カンファレンスの実施</li> <li>・通院に関する付き添いと服薬管理</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・直接的援助機能</li> <li>・直接的援助機能</li> <li>・ケースマネジャー機能</li> <li>・保護機能</li> <li>・連携機能</li> <li>・組織機能（※教員による直接的な援助）</li> <li>・仲介機能 連携機能</li> </ul>
<p>○9月 （施設生活）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・比較的安定的に過ごしている様子で、Aに対してマンツーマンでの対応の機会が多くあったことで穏やかに過ごしているようである</li> <li>・学校へ迎えにきた職員に対して黙りを入れる</li> <li>・ここまでのAの状況の振り返り（職員らの会議の中で）</li> </ul> <p>（父子関係）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・週末帰省は継続。時にAは「疲れる」とこぼす</li> </ul> <p>（学校生活）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・SSWよりAの攻撃的な面は減少傾向にあるという。1日のうちでSSWとマンツーマンでは、暴力は減少傾向で、Aが頑張ることを成功体験につなげていきたいとのこと</li> <li>・学校でのカンファレンス実施 カンファレンス時にAが職員のところへ尋ねてくる</li> <li>・Aはイライラ感を言葉で伝えられるようになっていること。暴言・暴力を我</li> <li>・Aはイライラ感を鎮める為、保健教諭にイライラ感を話していく</li> </ul> <p>（医療・通院の状況）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・通院・服薬管理は継続</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・施設生活への安定化のための関わり</li> <li>・暴力に対する指導</li> <li>・父子関係の維持と形成の支援</li> <li>・カンファレンスの実施</li> <li>・通院に関する付き添いと服薬管理</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・直接的援助機能</li> <li>・直接的援助機能</li> <li>・連携機能</li> <li>・組織機能</li> <li>・ケースマネジャー機能</li> <li>・SSWによる直接的援助機能（※教員による直接的な援助）</li> <li>・連携機能</li> <li>・組織機能</li> <li>・仲介機能 連携機能</li> </ul>

図1 小学校6年生のAの経過について

事実経過	援助展開	ソーシャルワーク 機能
<p>○ 10月</p> <p>(施設生活)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 多少、イライラ感や暴言は見られるものの比較的生活は安定的に生活していた様子。</li> </ul> <p>(父子関係)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 週末帰省時に早く寝かせるように実父と話す</li> <li>・ 実父が仕事のためカンファスが実施できず</li> <li>・ AはB子に対して「ぶん殴ってやる」と言い、イライラ感を強めている様子</li> </ul> <p>(学校生活)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 年下の生徒に対する暴言と暴力が見られるようになってきた</li> <li>・ 女子生徒の粘土作品を壊し泣かせてしまう</li> <li>・ Aは「眠くてイライラする」などと言い、周りの生徒に悪戯したり落ち着かない様子</li> <li>・ 宿泊研修でAは教員に対してベッタリとくっつき甘えた様子</li> </ul> <p>(医療・通院の状況)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 通院・服薬管理は継続</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 施設生活への安定化のための関わり</li> <li>・ 生活リズムに関する助言</li> <li>・ 通院に関する付き添いと服薬管理</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 直接的援助機能</li> <li>・ ケースマネジャー機能</li> <li>・ 仲介機能</li> <li>・ 調停機能</li> <li>(※教員による直接的な援助)</li> <li>・ 仲介機能</li> <li>・ 連携機能</li> </ul>
<p>○ 11月</p> <p>(施設生活)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ある程度生活には波はあるものの安定的に過ごしている状況</li> </ul> <p>(父子関係)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 週末帰省は継続</li> </ul> <p>(学校生活)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ Aは落ち着かない様子は見られたものの、暴力なく過ごすことができていた様子</li> <li>・ カンファレンスの実施。</li> <li>・ 年下の生徒にイライラ感を募らせ、脅すような態度をとる</li> </ul> <p>(医療・通院の状況)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 担当医よりAは自分のことが振り返ることができるようになったと言われる</li> <li>・ 服薬量が減らないことにイライラ感を示す</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 施設生活への安定化のための関わり</li> <li>・ カンファレンスの実施</li> <li>・ 通院に関する付き添いと服薬管理</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 直接的援助機能</li> <li>・ ケースマネジャー機能</li> <li>(※教員による直接的な援助)</li> <li>・ 連携機能</li> <li>・ 仲介機能</li> <li>・ 連携機能</li> </ul>
<p>○ 12月</p> <p>(施設生活)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ Aの思うような1日にならないことに対して、特定の職員のせいにしていた</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ カンファレンスの実施。</li> <li>①Aの冬休みの帰省について、②中学の進路について、③ひきとりについてなど</li> </ul> <p>(父子関係)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 週末帰省は継続</li> </ul> <p>(学校生活)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ Aは泣いている友人に対して話し相手になっていた</li> <li>・ イライラして学校で物品を壊してしまった</li> </ul> <p>(医療・通院の状況)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 通院・服薬管理は継続</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 施設生活への安定化のための関わりと話し合い</li> <li>・ カンファレンスの実施</li> <li>・ 通院に関する付き添いと服薬管理</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 直接的援助機能</li> <li>・ 調停機能</li> <li>・ 連携機能</li> <li>・ ケースマネジャー機能</li> <li>(※教員による直接的な援助)</li> <li>・ 連携機能</li> <li>・ 調停機能</li> <li>・ 仲介機能</li> <li>・ 連携機能</li> </ul>
<p>○ 1月</p> <p>(施設生活)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ Aの進路についてカンファレンスを実施</li> <li>・ 年上の女子生徒を押し倒してしまう</li> </ul> <p>(父子関係)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 週末帰省は継続</li> </ul> <p>(学校生活)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 年下生徒に対してやさしく接している様子も見られた</li> <li>・ 中旬から下旬にかけてAの言動や行動は落ち着かず、窓から遊げてしまったなどの行動が見られた</li> <li>・ 関係機関でのカンファレンスの結果、中学校では個別支援学級が適当との判断となる</li> </ul> <p>(医療・通院の状況)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 通院・服薬管理は継続</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ カンファレンスの実施</li> <li>・ 暴力に対する指導</li> <li>・ カンファレンスの実施</li> <li>・ 通院に関する付き添いと服薬管理</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 連携機能</li> <li>・ 直接的援助機能</li> <li>・ ケースマネジャー機能</li> <li>(※教員による直接的な援助)</li> <li>・ 連携機能 組織機能</li> <li>・ 仲介機能</li> <li>・ 連携機能</li> </ul>
<p>○ 2月</p> <p>(施設生活)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 落ち着かず、暴言・暴力が頻繁に見られた状況</li> <li>・ 職員のアに対する対応の齟齬があったことから、Aは暴れ刃物を持ち出す。又器物破損も見られた</li> </ul> <p>(父子関係)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 週末帰省は継続。</li> <li>・ 実父が施設に立ち寄ることに対して、頭がいっぱいになることがある</li> </ul> <p>(学校生活)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ Aは落ち着かない様子。なお喧嘩などでは教員の制止に従う場面も見られた</li> <li>・ イライラ感を押さえ、友人に謝罪したりなど成長した点が見られた</li> <li>・ 実父、学校関係者らを踏まえてカンファレンスを実施</li> </ul> <p>(医療・通院の状況)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 通院・服薬管理は継続</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 暴言・暴力に対する指導</li> <li>・ 暴言・暴力に対する指導</li> <li>・ カンファレンスの実施</li> <li>・ 通院に関する付き添いと服薬管理</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 直接的援助機能</li> <li>・ 直接的援助機能</li> <li>・ 保護機能</li> <li>・ ケースマネジャー機能</li> <li>(※教員による直接的な援助)</li> <li>・ 連携機能</li> <li>・ 社会変革機能</li> <li>・ 仲介機能</li> <li>・ 連携機能</li> </ul>
<p>○ 3月</p> <p>(施設生活)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ Aの暴言や暴力はエスカレート</li> <li>・ B子のをめぐり、暴言・暴力に発展。職員への暴力、窓ガラスを割るなどの器物破損も見られた</li> </ul> <p>(父子関係)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 週末帰省は継続。</li> <li>・ 春休み中は施設行事にも参加せず帰省となる</li> </ul> <p>(学校生活)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ イライラし落ち着かない日が多く、職員室で過ごす日もあった</li> <li>・ 担任教員が体調不良のときは、クラス運営に協力的であった</li> </ul> <p>(医療・通院の状況)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 通院・服薬管理は継続</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 暴言・暴力に対する指導</li> <li>・ 暴言・暴力に対する指導</li> <li>・ 通院に関する付き添いと服薬管理</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 直接的援助機能</li> <li>・ 直接的援助機能</li> <li>・ 調停機能</li> <li>・ 仲介機能</li> <li>・ ケースマネジャー機能</li> <li>(※教員による直接的な援助)</li> <li>・ 仲介機能</li> <li>・ 連携機能</li> </ul>
○ 3月中旬 卒業式		

図1 小学校6年生のAの経過について(続き)

以上のように本研究のような方法で継続的に分析・考察を試み、ソーシャルワークの機能・役割について検討してきた。そこでこれまでの研究結果を踏まえつつ課題をあげれば、子どもの状態像や置かれている状況、背景に対してさらに調査を深める必要がある点である。(2014年9月14日)

定段階では家族再統合・家庭復帰に関する評価が困難だったため援助の方向性としてはあげることができない状況であった。2. Aの生活の安定…Aは誰に対してもコミュニケーションのとり方が乱暴で、他者へ他害を及ぼす場合もある。そのためAが情緒的にも穏やかで、安定した生活を送れるような援助をできるようにし、Aの暴力行為への対応も検討していくこととなった(松岡是伸・小山菜生子(2012))。

## 註

- [1] 北川清一(2007) 2 社会福祉実践の枠組み ④役割と機能：エンサイクロペディア 社会福祉学(仲村優一・一番ヶ瀬康子), p.620. 中央法規, 東京.
- [2] 加登田恵子(2002) ソーシャルワークの機能：ソーシャルワーク(黒木保博・山辺朗子・倉石哲也 編), p.22-25. 中央法規, 東京.
- [3] 北川清一(2007) 2 社会福祉実践の枠組み ④役割と機能：エンサイクロペディア 社会福祉学(仲村優一・一番ヶ瀬康子), p.620. 中央法規, 東京.
- [4] 初期の施設での援助方針 施設入所にあたり、以下のような援助方針を定めることとなった。1. 親子関係の継続と形成…実父には、AとB子を養育していくイメージを入所時に確認し、その具体的方法として毎週末に実父宅へ週末帰省を実施できることである。この援助方針の根拠としては、実父はできるだけ自力での子育てを望み、一時保護(やむをえず)になってからも定期的に面会をしていたなど、実父の養育意欲を評価したためである。また家族再統合、家庭復帰については、援助方針策

## 文 献

- 北川清一(2007) 2 社会福祉実践の枠組み ④役割と機能：エンサイクロペディア 社会福祉学(仲村優一・一番ヶ瀬康子), p.620. 中央法規, 東京.
- 北島英治(2008) ソーシャルワーク論 ミネルヴァ書房, 東京.
- 高橋重宏(1998) 子ども家庭福祉論 ―子どもと親のウェルビーイングの促進―, 放送大学教育振興会, 東京.
- 日本社会福祉実践理論学会ソーシャルワーク研究会(1998) ソーシャルワークのあり方に関する調査研究, 日本社会福祉実践理論研究 7, 日本社会福祉実践理論学会
- 松岡是伸, 小山菜生子(2008) ソーシャルワークの機能と役割に関する一考察 ―児童養護施設での実践事例をもとにして―, 名寄市立大学紀要 2: 29-39.
- 松岡是伸, 小山菜生子(2012) ソーシャルワークの機能に関する実践的考察 ―児童養護施設での実践事例をもとにして―, 名寄市立大学紀要 6: 21-28.

*Original paper*

## **Practical Discussion of Social Work Functions and Roles:**

Review of Social Work Practices in a Foster Home

Yoshinobu MATSUOKA<sup>1),\*</sup>, Naoko KOYAMA<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>Department of Social Welfare, Faculty of Health and Welfare Science, Nayoro City University

<sup>2)</sup>Children's home, Kawawa Children's home

**Abstract:** This paper reviews an example of social work practices in a foster home, which clarifies the functions and roles of social workers in such homes. The significance of this study for society is that an analytical review of social work practices such as the one described here can contribute to the accumulation of data for the development of social practice theory. This study revealed that social work functions and roles were employed in every aspect to support children's lives. For support of children's lives, there was professional cooperation and organization in many institutions. The role of social workers was intended to enhance the quality of the children lives. On the other hand, the children were often observed as being vulnerable. Therefore, in order to care for children's well-being, it was critical that attention was paid to residential care and specific case management. Social worker functions and roles are important in ensuring that a child adjusts to its new living and social environment.

**Keywords:** social work functions and roles, social work practice, coping, responsiveness, vulnerability